

まとめにかえて

私は考古学に加え、歴史・民俗などに多少の知識を触れることができました。いずれの分野でもその原点は、一つひとつの小さな歴史・資料の複合的な積み重ねによる「地域史」にあると考えています。これからも「小さな土器のカケラ」を追いかけ、身体の動く限り野山をフィールドワークしていきたいと思います。

続いて 河野清一 ぶらり「散歩に読書 ミチクサノオト」です。

では、私は、山田さんの報告に引き続き、引退後に始めた「散歩に読書、ミチクサノオト」、これは、ブログノートなんですが、フラフラ歩いてミチクサしながらのエピソードからストリーとなるように文章化してみます。

構成は

大病で入院していた時に出会った

「漱石の夏休み」関宏夫 著

内容は、夏目漱石が大学生になった明治22年 子規宛に送った漢詩寄稿文「木屑録」

学生仲間5人と靈岸島から船で鋸南町の保田に上陸、海水浴や鋸山に登り、安房、小湊、銚子に至り、銚子から原文では、舟をやとい、利根川を遡り、明け方、三津堀に至り、東京へ戻ったという紀行。

ここで私が、興味を持ったのが漱石の描写した風景、東京湾を渡った船、利根川を遡行した舟、帰路東京へ戻った記録がないこと、

漱石の保田での話は、高校時代のサマースクールで現代国語の教師が語った記憶
そして 今回は 船と舟 利根川の遡行、帰路について、????。

退院後、著者の関さん(元、高校教師)にお会いしていろいろ尋ねた。

彼は、自らの作品の解説に加え、子規に木屑録を送った明治 25 年、子規自ら同地保田を訪れて、そのエピソードをまとめた「隠れ蓑」の著書を紹介され、近々、懸案だった鋸山の日本寺に漱石子規の交流記念碑を鋸南町の有志で設置する計画に誘われた。

それが設置されたのが 2014 年 5 月、当日のイベントに来られ講演された講師亂先生のレジメに、先の疑問を解説するデータを見つけた。

早速、県図書館、史料館にリファレンス。関係資料を照会する博物館、図書館、旧家の蔵の紹介があった。

後はフットワークに任せて博物館、図書館、そして、旧家の蔵。ここはすごい地域の人たちがあの大地震で崩れかかった蔵の修復活動をしていた。

この蔵からは、木下の江戸、明治の記録を伝える文書や遺物が残されており、

その資料整理作業に関わった村越さんらから、吉岡廻船問屋、内国通運支社にかかる史料を見せていただいた。

お探しの蒸気船通運丸関係は、品川の通運丸博物館に、そして、ここ木下河岸、吉岡廻船事業、民間蒸気船事業にかかる史料を閲覧させて頂いた

蒸気船事業を立上げた吉岡七郎の記録、図録、論考を見聞。

さらに、関連情報は、流山博物館、関宿城博物館 そして、利根川流域の民俗・文化に興味があればと 利根川文化研究会へと繋いでくれた。

利根川文化研究会は、かつて学生時代、高橋宏明さん、長谷川 勉さんと明治大学の資料室の資料整理のアルバイトをしていた杉山 さんらがやってた活動か？とたづねたら、前進はそうだったかもしれないが、平成に入って千葉大の川名 登先生による研究会だと分かった。

現在は、川名先生のご子息の川名 穎國學院大学 他大学の教員 高校教員、教員OB、歴史に興味ある方らで、

現在は明治大学の歴史資料室に事務所が置かれています。

ここに登場する川名先生は、私が関わった習志野市史編纂事業を立上げるきっかけとなった先生で、のちの市史編纂事業の編集に携わった千葉大の小笠原長和 國學院大学の大谷貞夫先生と繋がり この習志野市史を元に子ども向けに 副読本として「私たちの郷土習志野」→「習志野 その今と昔」という概説史の編集の仕事としてさせて頂きました。

話が広がってしまったのですが、
私の興味の移ろい、経過として見ていただきたい。

吉岡七郎の蒸気船事業と利根川文化研究会で学んだ利根川東遷の研究動向をまとめます。

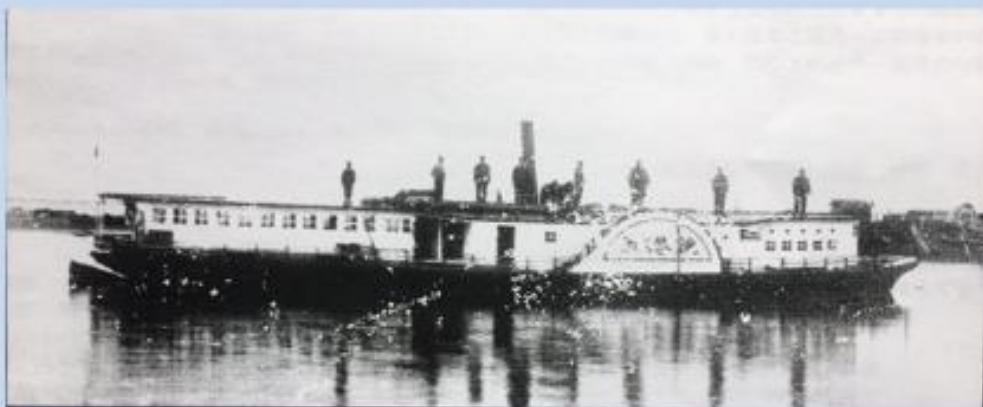
地元に公民館の歴史講座で使った資料を表記します

<研究調査活動>

「木下と蒸気船史料」の解題

<http://www.s-kawano.net/s-kawano/2014/07/post-138.html>

(資料内容) 明治期吉岡家及び銚港丸関連年表等



第二銚港丸建造に係る「結約書」史料を読んでみる

<http://blogs.yahoo.co.jp/yhp711/56399139.html>



史料解題後まとめられた資料(データ化)

銚港丸三船經營資料

<http://www.s-kawano.net/s-kawano/2017/02/post-197.html>



吉岡七郎と銚港丸(年表を参照ください)

吉岡家は、江戸期、河岸問屋、名主。明治期になっても戸長、郵便取扱人を務め、そして蒸気船経営と木下の政治、経済の中心にいました。

銚港丸船主三代は吉岡七郎(1837~1898)、その長男で木下郵便局長を長く務め、大正期には木下町長になった吉岡吉太郎(1859~1919)、吉太郎長男の吉岡孝太郎(1879~1936)です。

吉岡七郎は、「下総国北相馬郡川原代邑」(茨城県竜ヶ崎市)の木村藤左衛門長男として生まれ、その後、吉岡家へ養子に入り、以後目覚ましい活躍をします。

明治5年7月、利根川丸の布佐・銚子間就航、

そして、明治9年吉岡家は、内国通運の分社となり、その後の内国通運との密接な関係が続きます。

明治10年夏、内国通運は通運丸を木下・銚子間に走らせ、

明治12年(1879年)第一銚港丸が木下・銚子間に就航、

明治13年、第二銚港丸建造

明治14年、第三銚港丸と矢次早に建造し、早くも最大の個人汽船業者になった。その後、内国通運、銚子汽船の二大汽船会社とも巧みに同盟関係を結び、個人業者の淘汰の危機を乗り切りました。

明治28年2月、東京・銚子間(利根運河経由)を18時間で結ぶ直行便を就航させ、銚港丸は利根川を中心に千葉、茨城、東京と多くの旅人、荷物を運ぶとともに、これら三府県の文化を「水の回廊」として結び、木下にも「交通の結節文化」を運んだ。

吉岡七郎は、明治31年に亡くなり、その3年後には、成田鉄道木下駅が開業した。

明治35年には手塩にかけ、育成してきた銚港丸等4隻を吉岡家は手放します。

吉岡家は内国通運や銚子汽船とことなり、会社組織の形態はとらず、一貫して個人事業者でありました。

吉岡家の蒸気船経営期の名称は「銚子汽船会社木下支店」でした。

吉岡家の庭内には吉太郎が父、七郎を顕彰して、明治37年に高さ4メートルを超える「吉岡翁の碑」を建てています。

吉岡七郎は、蒸気船事業という当時の最先端事業を資金調達、事業リスク等を勘案し、共同事業という事業モデルを選択し、用意周到に銚港丸の運航を開始したのである。

明治28年2月、東京・銚子間(利根運河経由)を18時間で結ぶ直行便を就航させ、銚港丸は利根川を中心に千葉、茨城、東京と多くの旅人、荷物を運ぶとともに、これら三府県の文化を「水の回廊」として結び、木下にも「交通の結節文化」を運んだ。

吉岡七郎は、明治31年に亡くなり、その3年後には、成田鉄道木下駅が開業した。

明治35年には手塩にかけ、育成してきた銚港丸等4隻を吉岡家は手放します。

吉岡家は内国通運や銚子汽船とことなり、会社組織の形態はとらず、一貫して個人事業者でありました。

吉岡家の蒸気船経営期の名称は「銚子汽船会社木下支店」でした。

吉岡家の庭内には吉太郎が父、七郎を顕彰して、明治37年に高さ4メートルを超える「吉岡翁の碑」を建てています。

吉岡七郎は、蒸気船事業という当時の最先端事業を資金調達、事業リスク等を勘案し、共同事業という事業モデルを選択し、用意周到に銚港丸の運航を開始したのである。

続いて 利根川東遷については
昨年の 11 月 16 日のノートにまとめています。

「利根川東遷」に関する主な事項ごとに要点を整理し、解説します。

1. 利根川東遷とは何か

- **概要:**近世初期、利根川の流路を江戸湾から太平洋(銚子)へと大規模に付け替えた治水・利水事業。
- **目的(諸説あり):**
 - 洪水対策
 - 新田開発と農業生産力の向上
 - 江戸への水運整備
 - 東北地方からの防衛線構築

2. 河道変更の経緯(主な工事の流れ)

年代	工事内容
1594 年(文禄 3)	川俣堰を設け、古利根川から太日川(現・江戸川)へ流路変更
1621 年(元和 7)	新川通・赤堀川を開削し、常陸川筋へ接続
1633～1643 年(寛永年間)	関宿周辺の改修、江戸川・権現堂川・逆川の開削
1654 年(承応 3)	赤堀川の拡張により、利根川本流が銚子へ流れる形が完成

※正史『徳川実紀』に記録がなく、工事の詳細や目的には不明点が多く、近年再検討が進む。

3. 東遷の影響

- **地理的变化:**利根川の流路変更に伴い、下総国の一帯が武藏国に編入されるなど、国境も再編。
- **経済的效果:**江戸と関東・東北を結ぶ物流の大動脈として機能。
- **災害の影響:**洪水が頻発し、流域の村々に甚大な被害。湖沼(手賀沼・印旛沼など)は遊水池として機能。

4. 洪水と災害の記録(1596～1868 年)

- **災害件数(78 年間):**
 - 水害:54 回(長雨・台風)
 - 干ばつ:12 回
 - 飢饉・凶作:5 回

- 複合災害: 6回
- 著名な水害:
 - 1742年: 80万石が水没
 - 1786年: 印旛沼堀割普請が中止に追い込まれる

5. 幕府の治水政策と普請制度

① 恒常的な制度整備

- 勘定所主導: 勘定奉行・代官が治水を担当
- 四川奉行の設置(1725年): 利根川などの治水を専門に担当
- 国役普請制度(1720年~): 幕府領以外も含めた広域的な治水体制

② 災害時の臨時対応(5類型)

類型	内容
(ア)公儀普請	幕府が全額負担(例: 1757年、1791年、1840年)
(イ)大名手伝普請	大名に費用負担させる(1704~1847年に 15回)
(ウ)国役普請	指定国から費用徴収(1720年~、後に明治政府へ継承)
(エ)定式普請	毎年恒例の定期的な普請。人足・物資の徴用規定あり
(オ)自普請	村が自費で行う小規模工事

6. 利根川流域の治水・利水問題

- 浅間山噴火(1783年): 土砂流入で川底上昇、悪水が抜けず農業被害深刻化
- 関宿の悪水問題:
 - 木間ヶ瀬村と中里村で訴訟が頻発
 - 1850年、幕府と関宿藩が堀割工事を実施し解決(費用: 3226両)

7. 新田開発の展開

- 下総・上総での開発が活発
- 石高の増加:
 - 正保年間: 約44万石 → 天保年間: 約68万石(約24万石増)

主な新田開発事例

地域	内容
椿海	「千潟八万石」干拓(1660年代~) → 2740町、2万石の新田創出
印旛沼	3度の開発計画(1724年・1783年・1843年) → いずれも中止
手賀沼	1635年以降、商人主導で堀割・新田造成(230町余) → 洪水被害も多発

このように、「利根川東遷」は単なる河川工事ではなく、江戸の都市形成、関東平野の農業開発、防災政策、さらには地域社会の構造変化にまで影響を与えた、極めて重要な歴史的事業でした。

17~18世紀、下総国新島亮周辺の水行事情 要点

1. 香取海・新島料の新田開発の概要

近世初頭から香取海(かとりのうみ)と呼ばれた広大な潟湖を干拓し、新田地帯(新島料)が造成されました。これにより、利根川の水の流出先が失われ、流域の水害リスクが高まりました。

2. 佐原新川・新堀割川の開削

新田開発に伴い、佐原新川や新堀割川などの人工水路が掘削され、排水や舟運の改善が図られました。しかし、これらの水路が利根川本流化することで逆に水害の原因となるなど、治水と開発のジレンマが生じました。

3. 水行障害と治水対策

元禄期以降、利根川流域では洪水が頻発し、住民による築堤や川普請（河川工事）が盛んに行われました。地域住民が協力して治水工事を行う「下利根川通普請組合」などの組織も成立しています。

4. 既得権益と治水の課題

「百俵之海」など特定水域では、村々が水利権や漁業権などの既得権益を持ち、治水改修策の障害となるケースも見られました。

5. 技術的・制度的限界



当時の測量技術や組織体制では根本的な解決が難しく、治水と開発の問題は長期化しました。享保期以降も同様の課題が繰り返され、天保期の「水行直し」政策（幕府による大規模治水改革）へつながっています。

6. 研究の進展と意義

17～18世紀の下総国新島料周辺における水行問題への取組を対象とした研究は近年進展しており、香取海の干拓と新田開発が利根川流域の治水・水運に与えた影響、地域社会の協働、制度・技術の限界など、現代にも通じるテーマが明らかになっています。これらの研究は、天保期の治水政策の理解にも寄与しています。

下総新島料の開発と治水 – 内容の詳細

1. 開発の背景と経緯

- 下総新島料（現在の千葉県北部・茨城県南部）は、かつて香取海と呼ばれた広大な潟湖を干拓して造成された新田地帯です。江戸幕府は新田開発による石高増加と江戸の洪水防止のために、利根川東遷事業を推進しました。これにより、利根川の流路が東へ変更され、銚子沖から太平洋へ直接排水する流路が確立されました。

2. 新田開発と河川改修

- 干拓によって広がった低湿地や沼地では、度重なる洪水が発生。これに対応するため、佐原新川や新堀割川などの人工水路が掘削され、排水・舟運の改善が図られました。しかし、これらの水路が利根川本流化することで逆に水害の原因となるなど、治水と開発のジレンマが生じました。

3. 既得権益と治水の課題

- 「百俵之海」など特定水域では、村々が水利権や漁業権などの既得権益を持ち、治水改修策の障害となるケースも見られました。

4. 技術的・制度的限界

- 当時の測量技術や組織体制では根本的な解決が難しく、治水と開発の問題は長期化しました。享保期以降も同様の課題が繰り返され、天保期の「水行直し」政策（幕府による大規模治水改革）へつながっています。

5. 地域社会の協働

- 洪水対策として、地域住民が協力して治水工事を行う「下利根川通普請組合」などの組織も成立し、共同での川普請（河川工事）が行われました。

最新の研究成果

- 近年の研究では、17～18世紀の下総国新島料周辺における水行問題への取組が進展しており、香取海の干拓と新田開発が利根川流域の治水・水運に与えた影響、地域社会の協働、制度・技術の限界など、現代にも通じるテーマが明らかになっています。

- 具体的には、開発が進むほど水害が拡大し、治水と開発の「堂々巡り」が生じたこと、漁業活動が水の流れを妨げるとして治水と生業の対立が浮上したことなどが指摘されています。

今後の展望

- 歴史的経緯の理解は、天保期の水行直し政策(19世紀の大規模治水改革)を読み解く鍵となります。
- 「開発と自然のせめぎ合い」「地域社会の協働」「制度と技術の限界」といった、現代にも通じる課題が浮き彫りになっており、今後は地域史・環境史・社会史の観点からさらなる検討が期待されています。

まとめます。

山田さんの回想を読んで、また、石川さんからの次回通心の原稿依頼を受けて、思い出すままにダラダラと書いて見ました。

読んでいただきありがとうございます。